

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22320111

研究課題名(和文)言語教育におけるクリティカル・シンキング能力に関する到達目標・評価基準の開発研究

研究課題名(英文)Development of the Objectives/Descriptors/Evaluation Criteria for Teaching Critical Thinking and Intercultural Competence in Foreign Language Education

研究代表者

松本 佳穂子(Matsumoto, Kahoko)

東海大学・外国語教育センター・教授

研究者番号：30349427

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,300,000円、(間接経費) 3,990,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、北米・ヨーロッパのクリティカル・シンキング及び異文化対処能力の評価基準や評価ツールを参考にしながら、日本のグローバル人材養成のために大学の外国語教育で教えるべき構成要素を、到達目標・評価基準としてまず汎用的Can-doリストにまとめた。その後教員や学生へのアンケート調査、インタビューや実際の授業でのパイロット実験による検証を重ねて、Can-do項目の精緻化・修正・調整を行いつつ、授業のタイプ別のCan-doリストを作成した。同時にそれらCan-do項目を基に教材と評価ツールを開発して、様々な授業で更にパイロット実験を行い、最終的には、授業のタイプ別の指導モデルとして最適化を図った。

研究成果の概要(英文)：The aim of this project is to develop a framework, teaching materials and evaluation tools for critical thinking and intercultural competence for Japanese university students. We started out constructing objectives and criteria tailored to the Japanese EFL situation, first by referring to the FREPA items widely used in Europe and secondly, looking into various critical thinking tests available in North America. The initial, tentative list of descriptors has 29 items in 3 sections: knowledge, attitudes and thinking skills required to solve problems in intercultural communication. These items were validated both qualitatively and quantitatively for adequate modifications and adjustments after conducting questionnaire surveys and interviews with many teachers and students. We have also created the teaching materials and assessment tools for different types of courses based on the proposed objectives after a series of piloting, finally arriving at several generalized instructional models.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

 キーワード：クリティカル・シンキング 異文化間能力 Can-doリスト 到達目標 評価基準 指導モデルの構築
 教材・評価ツール開発 自己省察ツール(AIE)

1. 研究開始当初の背景

最近外国語教育（特に英語教育や日本語教育）の分野において、ヨーロッパ統一言語基準枠（CEFR）を参考にした様々なスキルのCan-doリスト作成が進んでいる。しかし言語教育に必然的に関連してくるクリティカル・シンキング能力（批判的思考）特に異文化理解や異文化状況に対処する問題解決能力（専門的には「異文化間能力」という）については、漠然と言語スキルと合わせて教えられているだけで、国際的人材育成に必須な能力としての指標や基準はなく、実証研究も少ない中で、各教育機関、教員が恣意的に目標として取り入れていた。

欧米にはクリティカル・シンキングや異文化コミュニケーションについての長年にわたる研究成果や実践の蓄積があり、それを言語教育と結び付けた実証的な研究も徐々に増えている。一方、ヨーロッパ評議会の言語政策部やECML（ヨーロッパ近代言語センター）においては、異文化対処・クリティカル・シンキングの能力を「ヨーロッパ市民」としての必須要件と位置づけ、その指標や基準の開発が進められてきた。北米でも、ペーパーテストによる数値的測定の限界が認識されるようになり、様々な「考える力」を測定するテストが開発されている。今や国際的留学基準であるTOEFL®やIELTS®などにおいては、クリティカル・シンキングや異文化状況を考慮した問題解決能力なしでは対処できなくなっている。

日本のPIISA（2003, 2006）の結果で読解力や考える力の低さが問題となり、小学校課程では国際的視野を育てるために英語や国際理解教育が導入された今、大学の外国語教育においてもこのような能力に注目して適切かつ具体的な目標を示すことは急務である。学士力においても問題解決能力が強調されているが、卒業後グローバル化の進む社会に出ていく大学生に対して、異文化状況で

のクリティカル・シンキング能力を体系的に教えることは、世界で活躍する人材育成において非常に大きな意味を持つと考えられる。

Can-doリストの概念の中心には、学習者が基準を自分の中に内面化し、将来にわたって自己チェック、自己調整による修正を続けて成長して行けるような生涯学習モデルがある。つまりクリティカル・シンキングと異文化対処能力の到達目標や客観的基準の設定は、日本の大学生が職業人として成長を遂げていくための指針にもなり得る。また教員の能力開発（FD）においても、「グローバル人材を育成する外国語教育」を行うための指導のモデル化を通じて、この分野に対する教員の取組が容易になるはずである。

2. 研究の目的

本研究の主たる目的は、大学の外国語教育に不可欠であるクリティカル・シンキング能力と異文化に対処する問題解決能力（異文化間能力）に焦点を当て、(1)海外の研究例や先駆的取組を参考にしながら、その構成要素を精査し、日本の大学における外国語教育において習得、達成すべき能力の到達目標を具体的かつ詳細なCan-doリストとして確定することであった。更にそれを実践の場で(2)演繹的、帰納的に検証し、到達目標、指導モデル、自己評価・客観評価のベースとして使えるものに収斂、改良して行った。最終的に(3)授業タイプ別のCan-doリストを完成し、それに沿った教材・評価ツールを開発し、パイロット実験によってそのモデル化・最適化を図った。加えて、指導方法、カリキュラム作成方法、評価方法などについてのウェブ公開、FD活動、教員研修を行って、研究成果の利用を推進している。

3. 研究の方法

(1)各国の事例と先行研究の収集と分析に基づき、日本の外国語教育（特に英語教育）に必要なクリティカル・シンキング及び

異文化対処能力の構成要素を抽出、再構築し、Can-doリストの原案を作成。それに対して、専門家、教員、学生にアンケート・インタビュー調査を行い、結果分析を基に試行版Can-doリストを完成。

(2) 様々なタイプの授業においてパイロット実験を行い、授業のタイプ別にニーズと状況にあったCan-do項目を確定。それを基に代表的な教材・評価ツールを開発し、授業のタイプ別に指導方法・モデルの最適化を図った。その際、ヨーロッパ評議会言語政策部が開発した自己省察ツール Autobiography of Intercultural Encounters (AIE) を使用したテキスト分析も実施。

(3) 学生の伸び、他の言語スキルとの相関などを含むこれまでの実験結果に基づいて、Can-do項目の妥当性、信頼性、実現可能性についての総合的な分析を行い、さらに修正、改善を加えた。

4. 研究成果

(1) 研究の全体像

まず日本の状況に合った異文化間能力(クリティカル・シンキング能力を含む)の指標を構築し、それに基づいて授業タイプ別の指導システムと共に、代表的な教材や評価ツールを開発した。指標構築には主に教師や学生に対するアンケート、インタビュー結果を使用した。それぞれのプロセスで循環的に修正・調整を加えるために、ヨーロッパ評議会言語政策部が作成した自己省察ツール(AIE)を使って、代表的な被験者に対する質的実態調査も行った。

(2) Can-doリスト構築

まず膨大なECMLの複文化・複言語プロジェクト(FREPA)の指標の中から、日本の言語教育と言語関連科目の中に取り込むべき、そして取り入れることが可能なものを抽出し、知識、態度、思考スキルという3つのカテゴリーに分け29項目にまとめた(演繹

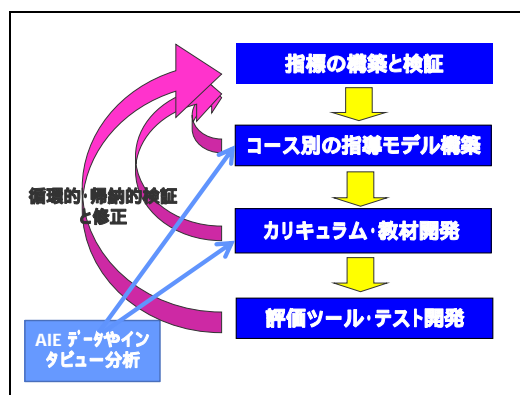


図1 研究の全体像

的検証)。そして帰納的検証を始める前段階として、この29項目について教員と学生へのアンケート調査、インタビューを行った。

FREPAにおいては、クリティカル・シンキングの要素は、異文化対処という視点からSkills(思考スキル面)に含まれているので、別途北米の様々な先行研究(Facione, 1990; Norris & Ennis, 1989等)や既存の評価ツール(エニス・ウェアテスト、コーネルテスト、ETSの認知能力テスト等)に含まれる構成要素と突き合わせつつ検討を重ねた。こうしてまとめた最も汎用的なCan-doリストを資料として最後に添付する。

(3) 指標項目の検証と修正

過去3年間にわたって様々な大学の教員と学生に対してアンケート調査(資料)やインタビューを行いつつ項目の修正・調整を行ってきた(最終的な回答者は教師82名、学生834名)。各能力記述文(Can-do項目)について、学生は「できない(1)」「あまりできない(2)」「おおよそできる(3)」「できる(4)」という4段階のリクター・スケールによって自己評価をし、一方教師は、自分が教えている学生の能力について指導側から見た評価を同様の4段階で行った。

「知識」に関する項目(1-12)、「態度」に関する項目(13-21)、そして「思考スキル」に関する項目(22-29)について教師と学生の回答に対してT検定を行

った。その結果、有意水準 $P < .05$ において、3項目(20、23、25)以外の全項目について有意差が確認された。

表1 カテゴリー別の平均とT検定結果

側面	被験者	平均値	SD
Knowledge (知識)	教師	1.79*	0.55
	学生	3.07*	0.49
Attitudes (態度)	教師	1.71*	0.79
	学生	2.65*	0.51
Skills (思考スキル)	教師	1.82*	0.92
	学生	2.76*	0.39

* T検定の有意水準 $P < .05$ において有意。

(4) Autobiography of Intercultural Encounters (AIE)

アンケートによる検証に加えて、ヨーロッパ評議会言語政策部門が開発・推進している自己省察的学習ツールである(AIE)をムードル・

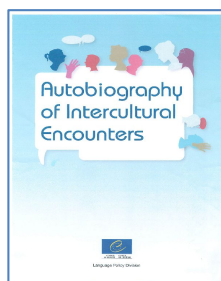


図2 AIE

サーバーの上に置き、学生たちに印象・影響の強かった異文化体験について詳細に記録させた。この学習ツールは一つの体験について53問の問いを投げかけながら、学生たちが異文化体験に直面して何を感じ、考え、どう対処し、その結果彼らの中で何が変わったかを詳細に振り返らせることにより、自らの学びを獲得するように作られている。80名分のデータについて、SPSS(頻度・係受け分析)とKHコーダー(ネットワーク分析)によって詳細なテキスト分析を行った。特筆すべきは、学生たちが日常生活の中で遭遇した印象に残る異文化体験の相手の出身国の多彩さであった。国名が明記されていないものを除いてもそれは23カ国に上り、ここにも、異文化間能力の教育の必要性が現れている。

KJコーダーによるネットワーク分析例
(異文化体験の肯定的な評価)

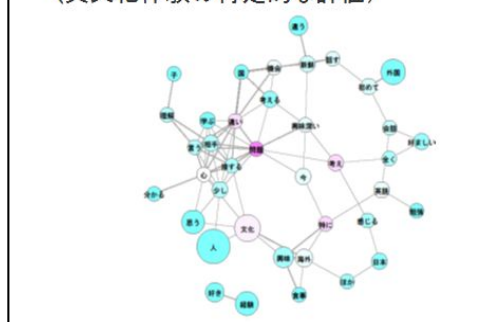


図3 ネットワーク分析例

このテキスト分析の結果を、循環的に指標、指導モデル、教材・評価ツール開発にフィードバックして生かしたが、テキスト分析から見た最も顕著な特徴は、日本の学生たちがどうしても異文化を持つ人を「他者」として自文化と二項対立的に捉えてしまう傾向である。かなり日本に長く居て日本のことをよく知っている外国人に対しても、共通点より相違点に目が向きがちであり、「内と外」或いは「日本人と他の国の人たち」という仕分けに基づいた名詞・形容詞・形容動詞の使用が多く、「外国人」という大まかな範疇の中に当然あるはずの多様性への言及はあまりない。今後は他国のデータとの比較により、日本人学生の特徴を更に明確に把握したい。

(5) 指導モデルのパイロット実験

AIEデータやインタビューの結果を基に、指標(Can-do項目)を調整しつつ、「知識、態度、思考スキル」の三分野に含まれる代表的な項目を授業の指導目標と関連付けた教材を開発し、10数名の協力者の19クラスでパイロット実験を行った。Can-Do型の目標はしばしば曖昧であるという批判を受けるが、教材開発に当たってはそれを細分化したルーブリックを作成し、具体的な指導目標と教材内容を対応させることで、曖昧な記述を修正したり、実情に合わない部分を差し替えたりする作業を行った。以下の科目群に対してルーブリックを作成し実験を行った。

1)必修英語のような基礎的言語スキル科目

- 2)よりレベルの高い言語スキル科目
- 3)専門性の高い ESP や EAP 科目
- 4)社会言語学のような専門的科目

また、同じ科目群の中でもレベルを調整した教材も開発し、海外や日本のメディアの報道を教材として使うことで、メディア・リタラシーの問題が自然に取り込まれるようにした。実験のために開発した教材のテーマは以下のようなものである。

- 日本のポップカルチャーの受容のされ方
- 文化によって違う礼儀・丁寧さの表現
- 様々な外国人差別のケース
- グローバルな目標と地域の利害の衝突(エコツーリズム、地球温暖化対策)
- コピー・ペースト(剽窃行動: plagiarism)に対する東洋と西洋の感覚の違い

細分化された到達目標(Can-do項目)の妥当性を統計的に検証するためには、これらの指導モデルに対する評価ツールを作成し、測定されるべき能力が確かに代表・測定されているか、更にそれが指導によって伸びているかという検証が必要であるため、様々な異文化状況を分析させる論述式テストを作成した。これは、多肢選択式、クローズ形式、短答型などの様々なテスト形式を試行した結果、構成概念が複雑かつ重複しているため、どれも適切でないことが判明したことによる。

評価ツール開発・検証と同時に、北米のクリティカル・シンキングテストとの相関も出した。ヨーロッパでは、質的検証の傾向が強く、評価に関しても長期的観察や活動の成果を詳細に記録したポートフォリオによるものが多い。日本にはまだそういう伝統や環境がないので、まず異文化間能力を授業で教えた後にその成果を測るテストを開発した。当然ではあるが、北米のテストの中でもエニス・ウェアテストのような記述式のものとの相関が高く(0.7程度)、インサイト・アセスメント社の短答式のテスト、ETSの多肢選択式テストとの相関は低かった(0.5程度)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

小山由紀江(2011). 欧州評議会の言語政策 - Learning Languages for Social Cohesion-, New Directions、査読無、29号、43-60.

松本佳穂子(2012). 異文化対処能力及びクリティカル・シンキング能力の指標構築の試み、異文化交流、査読無、12号、203-222.

小山由紀江・松本佳穂子・大野秀樹(2012). Teaching Intercultural Competence and Critical Thinking in EFL Classes in Japan - Developing a framework and teaching material、第17回環太平洋応用言語学会予稿集、査読有、73-74.

松本佳穂子(2013). 異文化対処能力の指標及び教育システム構築の試み、査読有、P.Underwood 他編「言語文化の諸相」、東京:メディアランド、pp.138-153.

松本佳穂子(2013). クリティカル・シンキングを伸ばす英語ライティング指導 - グローバルな人材育成を目指して -、異文化交流、査読無、13号、77-92.

松本佳穂子(2014). Development of Instructional Models for Teaching Intercultural Communication to Japanese Students、第18回環太平洋応用言語学会予稿集、査読有、Section D2.

松本佳穂子(2014). 異文化間能力の指標と指導モデル構築の試み、文明、査読無、18号、51-63.

小山由紀江・松本佳穂子(2014). Analysis of Descriptions in Autobiography of Intercultural Encounters Using KH Coder. *The Proceedings of 2014 SITE Conference*. 査読有, Vol.1, 1119-1124.

[学会発表](計10件)

松本佳穂子・大野秀樹・小山由紀江(2011). "The Development of the Can-do Statements for Intercultural Communication and Critical Thinking" MCC 2011年度国際大会(於ポーランド、ウツズ)

松本佳穂子(2012). "Teaching Intercultural Competence to Japanese Students" British Council 主催 Going Global 国際大会(於英国ロンドン)

松本佳穂子・小山由紀江(2012). Teaching Intercultural Competence and Critical Thinking in EFL Classes. 第17回環太平洋応用言語学会(於中国北京)

松本佳穂子・小山由紀江(2012). The Use of Moodle-based Self-reflective Tool to Develop Teaching Models of Intercultural Competence for EFL Classes. 日本教育工学会第28回全国大会(於長崎大学)

松本佳穂子(2013). Analysis of Japanese Students' Perceptions of Intercultural Encounters. 第11回IALIC国際大会(於英国ダラム)

小山由紀江・松本佳穂子・大野秀樹(2013). Teaching Intercultural Competence in EFL Classes in Japan. 第20回ICC国際大会(於ブルガリア、ソフィア)

松本佳穂子・小山由紀江(2013). "異文化対処能力及びクリティカル・シンキング能力の指標と教授モデル構築の試み" 第39回全国英語教育学会(於北星学園大学)

小山由紀江・松本佳穂子(2014).

Creation of a Framework for Teaching Intercultural Communication to Japanese University Students. 第17回Asia-TEFL国際大会(於フィリピン、マニラ)

松本佳穂子・大野秀樹・小山由紀江(2014). "クリティカル・シンキングを含む異文化間能力の指標構築を目指して" 大学英語教育学会クリティカル・シンキング研究会主催シンポジウム(於大東文化大学)

小山由紀江・松本佳穂子(2014). Creation of a Framework and Instructional Models for Teaching Intercultural Communication. The 2014 International Conference for Academic Disciplines(於米国ラスベガス)

〔図書〕(計2件)

大野秀樹・松本佳穂子編著(2014). クリティカル・シンキングと大学英語教育 III (ISSN 1882-235X) CD-Rom 出版

大野秀樹・松本佳穂子編著(2011). クリティカル・シンキングと大学英語教育 II (ISSN 1882-235X) CD-Rom 出版

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松本 佳穂子 (MATSUMOTO, Kahoko)
東海大学・外国語教育センター・教授
研究者番号: 30349427

(2) 研究分担者

1. 小山 由紀江 (KOYAMA, Yukie)
名古屋工業大学・工学研究科・教授
研究者番号: 20293251

2. 大野 秀樹 (OHNO, Hideki)
大東文化大学・経済学部・准教授
研究者番号: 40343628

(3) 連携研究者

1. 伊東 祐郎 (ITO, Sukero)
東京外国語大学・留学生日本語教育センター・教授
研究者番号: 50242227

2. 中西 千春 (NAKANISHI, Chiharu)
国立音楽大学・音楽学部・教授
研究者番号: 30317101

資料

<異文化対処能力についてのアンケート>

氏名

回数	学年	その他の情報															
		TOEFL	TOEFL	高校	実習1	実習2	実習3	実習4	実習5	実習6	実習7						
1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○
2	○	2	○	2	○	2	○	2	○	2	○	2	○	2	○	2	○
3	○	3	○	3	○	3	○	3	○	3	○	3	○	3	○	3	○
4	○	4	○	4	○	4	○	4	○	4	○	4	○	4	○	4	○
5	○	5	○	5	○	5	○	5	○	5	○	5	○	5	○	5	○
6	○	6	○	6	○	6	○	6	○	6	○	6	○	6	○	6	○
7	○	7	○	7	○	7	○	7	○	7	○	7	○	7	○	7	○
8	○	8	○	8	○	8	○	8	○	8	○	8	○	8	○	8	○
9	○	9	○	9	○	9	○	9	○	9	○	9	○	9	○	9	○
10	○	10	○	10	○	10	○	10	○	10	○	10	○	10	○	10	○

以下は、あなたの現在の異文化対処能力についての質問です。最も当てはまるところの○を一つ塗って下さい。(鉛筆でもボールペンでもかまいません)。用紙は折り曲げないようにお願いします。「学習中の外国語」については一時間かけて学んできたものを一つ選んで答えてください。

<知識面=言語と文化>

	そうではない	あまりでもない	知識とスキル	そうである
1	○	○	○	○
2	○	○	○	○
3	○	○	○	○
4	○	○	○	○
5	○	○	○	○
6	○	○	○	○
7	○	○	○	○
8	○	○	○	○
9	○	○	○	○
10	○	○	○	○

11	異文化状況においては、母国言語に慣れたままでも異なる文化に適切に対応し、母国に慣れたままでも、その文化に適切に対応するための解決策を模索し、必要に応じて学習機会を必要とする。	○	○	○	○
12	異なる文化にはその国特有の価値観があるが、共通の価値観がある。文化は変化するものである。	○	○	○	○

<態度面>

13	異なる文化の価値観や習慣を尊重し、母国文化に批判的に見ることが出来る。	○	○	○	○
14	異なる文化の価値観や習慣を尊重し、母国文化に批判的に見ることが出来る。異文化に寛容な心を持つことが出来る。	○	○	○	○
15	異文化の価値観や習慣を尊重し、母国文化に批判的に見ることが出来る。異文化に寛容な心を持つことが出来る。異文化の価値観や習慣を尊重し、母国文化に批判的に見ることが出来る。	○	○	○	○
16	異なる文化の価値観や習慣を尊重し、母国文化に批判的に見ることが出来る。異文化に寛容な心を持つことが出来る。異文化の価値観や習慣を尊重し、母国文化に批判的に見ることが出来る。	○	○	○	○
17	異なる文化の価値観や習慣を尊重し、母国文化に批判的に見ることが出来る。異文化に寛容な心を持つことが出来る。異文化の価値観や習慣を尊重し、母国文化に批判的に見ることが出来る。	○	○	○	○
18	異なる文化の価値観や習慣を尊重し、母国文化に批判的に見ることが出来る。異文化に寛容な心を持つことが出来る。異文化の価値観や習慣を尊重し、母国文化に批判的に見ることが出来る。	○	○	○	○
19	異なる文化の価値観や習慣を尊重し、母国文化に批判的に見ることが出来る。異文化に寛容な心を持つことが出来る。異文化の価値観や習慣を尊重し、母国文化に批判的に見ることが出来る。	○	○	○	○
20	異なる文化の価値観や習慣を尊重し、母国文化に批判的に見ることが出来る。異文化に寛容な心を持つことが出来る。異文化の価値観や習慣を尊重し、母国文化に批判的に見ることが出来る。	○	○	○	○
21	異なる文化の価値観や習慣を尊重し、母国文化に批判的に見ることが出来る。異文化に寛容な心を持つことが出来る。異文化の価値観や習慣を尊重し、母国文化に批判的に見ることが出来る。	○	○	○	○

<スキル面>

22	異なる文化の価値観や習慣を尊重し、母国文化に批判的に見ることが出来る。異文化に寛容な心を持つことが出来る。	○	○	○	○
23	異なる文化の価値観や習慣を尊重し、母国文化に批判的に見ることが出来る。異文化に寛容な心を持つことが出来る。	○	○	○	○
24	異なる文化の価値観や習慣を尊重し、母国文化に批判的に見ることが出来る。異文化に寛容な心を持つことが出来る。	○	○	○	○
25	異なる文化の価値観や習慣を尊重し、母国文化に批判的に見ることが出来る。異文化に寛容な心を持つことが出来る。	○	○	○	○
26	異なる文化の価値観や習慣を尊重し、母国文化に批判的に見ることが出来る。異文化に寛容な心を持つことが出来る。	○	○	○	○
27	異なる文化の価値観や習慣を尊重し、母国文化に批判的に見ることが出来る。異文化に寛容な心を持つことが出来る。	○	○	○	○
28	異なる文化の価値観や習慣を尊重し、母国文化に批判的に見ることが出来る。異文化に寛容な心を持つことが出来る。	○	○	○	○
29	異なる文化の価値観や習慣を尊重し、母国文化に批判的に見ることが出来る。異文化に寛容な心を持つことが出来る。	○	○	○	○
30	異なる文化の価値観や習慣を尊重し、母国文化に批判的に見ることが出来る。異文化に寛容な心を持つことが出来る。	○	○	○	○